

# 名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻（九）

浅井圭子

## 『浅間ヶ嶽焼書付』

今回の翻刻は、名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻（八）（『あいち国文』第八号 平成二六年九月 あいち国文の会）に続くもので、『続学舎叢書』第二冊の最後部の七二丁表以下に所収されている『浅間ヶ嶽焼書付』の翻刻である。本書は、天明三年（一七八三年）七月の浅間山大噴火時の災害に関する記録（七二〇一八八オ）と、『文月の記』（八九〇一〇〇オ）、さらに、これらとは異なる時点での書写と考えられる被害状況の記録（一〇一〇一〇一三ウ）とを、まとめて綴じたものである。『文月の記』の奥（一〇〇ウ）には、「右尾藩府南郊松涛居主人之以蔵本 安政三丙辰歳三月十有六日 蓬左城東々杉邑之借宅おゐて写之 珍文館主人蔵」の識語を有する。「珍文館」は、

書写者小寺玉晃の筆名である。「松涛居主人」は、（八七オ）にもある。『江戸狂歌壇史の研究』の第四章「江戸狂歌文化と尾張戯作界」の中に江戸の「松濤斎調意」の名があるが、玉晃との関係についてはまだ確認できず不明である。（八五ウ）（八六オ）には、絵地図が書写されている。被害の状況を、朱、濃墨、薄墨、薄藍に色分けして記し、村名など地名が細部まで丁寧に書き込まれている。写真を掲載し、地名を翻刻した。

今号では、紙幅の関係上、前半部分の翻刻のみを掲載し、後半は次号に掲載する。

国文学研究資料館のデータベースの『文月浅間記』写本・類本一覧（二〇一〇年一月現在）に四十本が掲げられており、写本の表現と内容形式から二系統に分類されている。この中に、蓬左文庫蔵本は載っていない。

国立国会図書館蔵の写本『浅間山焼記』(YD A 699)を複写にて校合したところ、記載の順序と内容量が異なる。一部分(七三オ・七四ウ・八一ウ・七八ウ・七九オ・七九ウ・八〇オ)は、語句の異同があるものの内容ほぼ同じである。後ろに【校異】を示す。

『日本庶民生活資料集成』第七巻飢饉・悪疫の中には、「天明三年卯六月浅間山大焼一件記」と「浅間山焼荒一件 付浅間山荒之日并其外家并名前帳」が翻刻されている。「浅間山大焼一件記」は、菅原村の名主による実録で、内容は異なるが、蓬左文庫蔵本に「江戸表え其節降候砂と毛」(八七オ)とあるところ、同書には「江戸表町まゝえは灰にましり長さ八寸くらい宛の毛降候よし。尤色は灰毛色也と及承候。江戸御城内えは長さ壹尺貳寸程つゝの毛降候取沙汰有之候由」とあるなど、具体的に記されており、同書の解題によれば、いわゆる「浅間山大変記」とよばれる系統が、くりかえし書写されて変化した写本の多い中、「おそらく原本と認めてよいであろう」としている。

『天明三年浅間山噴火史料集 上』に翻刻されている二十本の史料のうち、蓬左文庫蔵本と一部分ではあるが内容が一致している本は、「15浅間山焼出記事」、「16天明三年江戸風説書」、「19栗園漫抄」である。

## 【凡例】

翻刻にあたり、底本にできる限り忠実であることを原則としたが、読解の便宜上、次のような処理をした。

1. 漢字は現在通行の字体に改めた。但し、哥・鉢・云などはそのままとした。
2. 合字は、開いて表記した。
3. 各丁末に、丁数・表(オ)・裏(ウ)を符号で示した。
4. 改行は、必ずしも原本に対応しているわけではない。

## 【翻刻】

『浅間ヶ嶽焼書付』(前半)

信州金地村高貳千石伊丹雅楽之助御小納戸三番丁住居候人

知行所追分の方豎壹里巾三拾八間程地中より

吹出村数近辺四拾三ヶ村一面二失申候其外家数

百七拾軒程是も一向不相見人馬数多死失

吹出より今以焼申候当四日より之事故御届有之候

天明三年卯七月七日

〈七三オ〉

私御代官所上州群馬郡川嶋村北牧村より訴出候旨  
同国吾妻川通去ル八日四時山津浪二而泥岩火石等

夥敷押出川嶋村より松御閼所北牧村家居田畑共  
不殘流失仕尤山手二少々家居相殘候迄二而流死  
人数相知不申存命之者有之間敷と推察仕候事  
書候万一農業又は秣蒨二罷出候者ハ相殘可申哉も  
相知不申候段申候罷出候迎も当時渴命二及哉(七三ウ)

可申候より外無之旨申出候右川通村々如何可  
有之哉難計奉存候方申立候付早速手代指遣  
見分為仕追而可申上候得共先右之段御届  
申上候以上

卯七月 原田清右衛門

一道中奉行衆え幸手宿より注進書付之写 (七四オ)

乍恐以宿送奉申上候

一日光道中幸手宿問屋年寄奉申上候当宿より  
八町東之方字権現堂川但利根川之内二御座候昨  
夜中より今九日昼八時迄家藏敷破損五六寸角之  
立柱四五尺丸之梁木敷居鴨居戸板貫桁竹  
屋ねを葺候躰之麦藁其外臼重箱桶躰之  
家具類細く二碎四五尺丸之生木之松杉五六尺より

(七四ウ)

壹丈位迄之諸木なる皮も摺むけ元末とも

さ、らのことく相成川中六七間之間川一盃二而  
通船も難相成程夥敷流申候此間十日余

一向雨降り不申早川二御座候処黄黒之泥水  
急二三四尺相増申候男女出家溺死之者は迄  
十三四人馬壹疋川縁流申候川中之儀ハ何程  
流申候哉相知不申候右二付乗船仕見候処

(七五オ)

破候鞍二上州群馬郡川嶋村之書付有之候付  
右権現堂川宿、懸而上州藤の木河岸之申所也  
船之者え承尋候処川嶋村ハ湯治場伊香保より  
廿里程輿之乍無急度申聞候右泥水故歟鯉鯪  
鱸之類浮上り河岸え寄夥敷手取相成申候  
右ハ先達而御触も御座候付変失之儀故乍恐  
以宿繼可々申上候以上

(七五ウ)

天明三年 伊奈半左衛門御代官所

卯七月九日 武州葛野郡幸手宿

問屋小左衛門  
年寄仁左衛門  
道中御奉行所様

別紙

(七六オ)

一御勘定所え御代官原田清右衛門殿より去十一日より昨十四日迄

所より之注進今日被相達候書付之写

私御代官在所上州吾妻郡群馬村山津浪之

趣先達而御届申上候処又候追々訴出候ハ当月八日

四ツ時信州浅間山拔山津浪ニ而泥水大岩火石等

五六尺程高如黒雲相見右之内ニ火煙相立

熱湯之ことくにて夥敷押出浅間山近辺并

〔七七六ウ〕

吾妻川通村々流死人数不相知田畑家居等

流失仕候旨右之内ニ而村中不残人別家居共

流失仕候も有之段近村々より訴出申候若農業

他出等仕候者ハ相残可申哉難計乍申候仮

相残罷在候迎も及渴命候より外無之旨右躰

之儀故道橋等通路無之巨細之儀ハ難相分乍

訴出申候仍之早速手代指遣見分爲度委細

〔七七七オ〕

之儀追而可申上候得共先右之段御届申上候尤右

之趣御取箇方えも御届申上候以上

卯七月

原田清右衛門

御勘定所

人別家居田畑流失訴出候分

〔七七七ウ〕

吾妻郡

箱嶋村 五町田村 三嶋村 鎌原村

大前村 原町 宮城村

群馬郡

南牧村

×

〔七八オ〕

右之通御座候

一御勘定所え御代官より申達候趣

覚

中山道

信州佐久間郡

軽井沢宿

右宿之儀浅間山麓ニ御座候処去月廿九日より浅間山大焼震動雷電夥敷家鳴続百姓共追々立退候処 〔七八ウ〕

当月七日夜四ツ時頃より大石夥敷降り懸り年寄

又八と申者屋ねえ大石之火玉落懸即時ニ燃出

夫より四五ヶ所一円ニ燃立一宿不残焼候趣ニ御座候

名主六右衛門と申者父子水帳其外御用出納取出度

身命限相働外より取出候処破り候竹笠并塵え

両度大石落懸り被打倒漸々起上逃去候乍

六右衛門娘孫下女兩人何方え参候哉夜中之儀ニ付

〈七九才〉

不相知定而石二被打相果候儀と存候而六右衛門申候

右之外怪我人死失之程難計御座候

中山道

信州佐久間郡

沓掛宿

追分宿

右貳ヶ宿も浅間山麓二而前書之通軽井沢宿同様

大変と相聞候得共宿中不残何方え逃去候哉 〔七九ウ〕

彼地陣屋え一向否不申出様子相知不申且手代共も

罷越見分等仕候儀相成不申候

中山道

上州碓氷郡

板鼻宿

右宿より訴出候ハ五月廿八日六月廿八日当月五日浅間山

焼吹出候灰厚霜程降申候処当月六日暮六時より

同八日未刻迄昼夜共震動雷電仕無絶間石砂 〔八〇才〕

降七日午刻より申刻過迄二時半程如闇夜行燈

挑灯二而漸用事相達申候凡石砂厚サ壹尺

壹寸程降積吹溜ハ壹尺四五寸も有也弱家之方

御伝馬役相勤候者二軒其外裏家小家数多

被押潰田畑作毛ハ不及申青草無之指当

馬飼料無之難儀仕候旨訴出申候

右ハ私御代官所中山道信州上州四ヶ宿此度 〔八〇ウ〕

浅間山焼石砂降就中信州三宿之儀ハ退転

同然二相成候趣二御座候得共今以焼静り不申候

彼地二罷在候手代共見分罷越候儀も相成不申候間

追而委細相記可申上候得共先右之段御届

申上候以上

卯 七月

遠藤兵右衛門

〔八一才〕

乍恐宿継を以御訴申上候御事

一先月末方より信州浅間山震動仕焼砂相降

候之儀数度御座候処去五日夜中厚サ五分程

相降申候別而同六日夜六時より夥敷吹出夜中

雷電大鳴翌七日昼も如闇夜二而降通し其後

弥大降二而同八日昼四時過迄降申候砂之厚サ

貳寸七分余壺坪計立候処壺石五斗三升余り 〔八一ウ〕

御座候但壺升砂重サ四百三拾匁御座候田畑え

降候砂五六寸仍之作物一向二砂埋申候然共

右之間雨ハ少も降不申候八日八ツ時利根川

石泥之水流大石火燃ながら相流川中一面二  
煙立陸ニ押上申候仍之当宿五料岩国谷

通路相止日光通往環相止り申候三国通同様ニ而  
通路相止り申候付乍恐宿繼を以御訴申上候以上(八二才)

天明三卯 日光御例幣使道

七月 後那須宿

前群馬郡 玉村宿

問屋年寄 三郎治

同 庄右衛門

道中御奉行所様

右之通ニ御座候

(八二ウ)

一御用番御老中え前田右近殿より被相達候趣  
一信州浅間山去月下旬より燃出候趣ニ而当月え  
至り別而強相成私在所上州七日市領え折々焼  
砂降候処同六日夜中より甚震動強焼砂焼石  
降翌七日期より震動無間断相聞焼砂焼石降  
積同日夜二入弥強相成所ニより五六寸積り候旨同日

(八三才)

昼時頃より如闇夜相成焼砂震動等未相止  
不申候段在所家来共より申越候付先此段候他

申上候猶又追々相記可申上候以上

七月十一日 前田右近 (八三ウ)

(八四才) (八四ウ) 余白

天明三癸卯歳七月二日比より信州浅間山鳴出し北山より  
東南北の国々をさして灰砂降日々の震動止む事なし  
別して浅間より廿里程か間は六日より空赤く悉く  
朦朧として更に東西分らず七日巳の刻比より焼砂泥  
降出し昼夜の差別なく鳴動雷の轟くよりもすさましく  
家居なりわたり軽井沢坂本の遠近我もくくと逃去りしか  
はたして八日午ノ刻ともおほしき比大内沢と云所より吹出し  
吾妻川まじへ泥湯大石の高サ十五丈余り横巾三里程押出し  
泥湯ハ熱上り利根川通り薄墨の在る行程五六十里の所わづか  
二時計に押流し家屋其外家財小道具材木立木其中へ  
死人何万人とも数しれず牛馬獸に至る迄打交り又は松原杯

(八五才)

(八五ウ・八六才) 絵地図(便宜上110頁に掲げる。)

(浅間山の西側和田峠から南へ)

小諸ー和田ー追分ー沓掛ー軽井沢ー碓井峠(信濃上野  
境)坂本ー小関所ー松井田ー安中ー板鼻ー高崎ー倉ヶ  
野ー新町ー本庄ー深谷ー熊谷ー

(浅間山の麓御林の南から)

狩宿―上野―大戸―三倉―(榛名山)―ユカシ村―アツタ村―室田―高崎 伊香保湯―水沢―柏木―高崎  
伊香保湯―野田―金子―高崎

(浅間山の麓、吾妻川の南側岸を上流から)

大内沢・蒲原・阿宋田・小宿村・袋倉村・古松村・能  
ヤ村・河原村・三島村・横壁村・アツタ村・此所松原・  
河戸村・金井村・岩井村・植栗村・小泉村・荒巻村・  
キクダ村・五丁田・笹嶋村・御関所・祖母嶋・北関所  
(利根川の南側岸を川下へ)

北関所・南奈・金井村・渋川村・中村・真政・八原村・  
大久保・惣社・土村・御関所・五料(カラス川の西側  
岸を南へ) 島村・飯田・下仁手・長沼・上仁手・ユタ  
リヤウ・向佐戸・ヤツタ嶋(神名川の東側岸を南へ)  
宮戸・小ハセ・元仁手・タツウ・田中・佐々戸・三友  
ガシ・八丁河岸・鳥渡河岸・藤木(利根川の南側岸へ  
もどつて川下へ) ヨコセ・中セ・タカシマ・ニツ小ヤ・  
前小ヤ・マ・田・出来シマ・女沼・善ヶ島・小シマ・  
大ノ・万和田

(鳥居峠、白根山の東、吾妻川の北側岸を上流から)

田城・大前村・寸久保・中井村・赤羽村・ハンテキ・  
今宮村・羽根尾村・クサキ村・坪井村・中野村・林村・  
河原村・ヨコヤ村・松尾村・岩下村・矢倉村・合原村・

原町・中ノ久村・イセ町・青山村・市田村・村上村・  
万ノ古村・北奈・中郷村・吹矢村・白井村・(沼田村)・  
柴村・ツナトリ村・イセ崎・今泉・室村・下道寺・馬  
見崎・中島・平塚・奥杉・徳川・大立・ムサシ嶋・前嶋・  
前小ヤ・堀口・押切・小嶋・高林・古戸・仙石・古海・  
マイ木・赤岩

(大内沢と田城の間に) 大笹

(田城の東から)

草津湯・小サメ村・タイシ村・笠村

万度湯・入山村・半下村・赤岩村・沢渡村・四方湯

(越後上野境から東へ)

三国峠・サルカキヤウ・(沼田村)・前橋・関根・赤木

村

(大門谷から東へ)

大門谷―桐生―キマター足利―生川―佐の―富田―犬

伏 富田―栃木(下野) (富田の東に) 館林

(イセ崎から東へ)

イセ崎―リユマヒユ―太田―八木―生川(上州)

(利根川に朱で火砕流が描かれている中に)

火石 四間 八間

(頭注) ○濃墨ハ吹出しの場所

○薄墨ハ在る人ノ押流し一向跡方もなき所

○ウス藍ハ泥湯押し所

(八六才)





其まゝに浮しまのごとく成て流れ潰れし家百軒式百軒  
ほど一群と成りて流るゝも在申の刻比に至りてハ火石すさ  
ましく流れ大石は炎出小石ハけむり立ち水中よりハ湯玉上  
り夫に交りて流るゝ死人ハ爰に千人かしこに千人ひと  
かたまりに成りて躰崩れ或ハ焦け女とも男とも分りかた  
まことに紅連大紅連焦熱地獄の有さまも斯やと恐ろしく  
目もあてられずすべて利根川通りハ泥湯充滿して

山とも里とも分らず泥海のごとくなり沼田神名小山川  
などへ死人火石押込返絶たり平塚河岸に止りたる

四けん八けんの火石を初として数万の火石雨天には  
すさましく燃上りたとへん方なし吾妻郡蒲原村

千人余の所に拾七人助命有こと候へハその余の在ゝハ  
是にて推量有べし爰にしるす事ハ絵図の有増にてへ八六ウ

其場所に至りては中々筆墨につくしかたたく前代

未聞の変事にてそ有ける

此絵図江戸向留故堀隼人殿家老清水儀左衛門殿より

同年冬十一月廿日付にて十二月六日二届常陸并江戸

表え其節降候砂と毛筆も束何猷の毛とも

不相知

右松涛居大人以所蔵写之(朱)

佐太奈志草

天明三寅年六月廿九日曇り折々雨降当年は時節より涼しく

今日昼前四ツ時比丑寅の方ニ当り雷の如く又地震の如く暫  
之内鳴強く響致し人々不審を立、何方ニも聞へ候由前日ハ  
大風雨も御座候

同朔日曇り雲も騒キ候し夕方亦昨日之通り

同二日雲さわぎ殊之外涼しく今夕方又々北東の方鳴響き戸  
障子もあらち  
(八七オ)

暫有て相止雷鳴も不聞一昨日より鳴ひゞきつよく

同三日天気能涼しく少し鳴も有之候

同四日天気能今日ハ鳴も聞へず

同五日天気宜今日少し暑気つよき方ニ而今夜中九ツ前北東

の方鳴動致し九ツ過強く鳴動き暫之内鳴相止ム

同六日天気能暑気強今夕より東北鳴動強く致し五ツ比迄ニ

つよく鳴つゞき四ツ時比より少し鳴相止ミ候処同夜半比よ

りハ至而つよく鳴動致しつゞき人々さわぎ色々沙汰致し

候へ共何故と云事不相知名古屋中近在近国何方も鳴同候京

都えも聞へ候処も去廿九日以來同様之由夜前より至而強く

鳴つゞき人々驚き騒ぎ七夕出仕も表出仕も無之評判のみ先

比より当年浅間山常より強く焼候而も木曾路登たる者残候

へハ浅間山いよく大焼と成候事哉とも申北海鳴響致すにや

とも申北辺空も随分おだやかに替る事なく候得共(八七ウ)

鳴動の音安心ならずと夜に至而益鳴動強町々も起居し武家

にてもさわぎ終夜不寐今日御中間方え被仰付東北の方え早  
足之者勤候由北東の方あかるく見へ候方も有之候由

同八日天气能夜前より終夜至てつよく鳴動今朝弥鳴続き朝  
四ツ比寔ニ遠方の鳴とハ不為絶ニ鳴大雷の如く夫より程な  
く鳴納り昼後静ニ相成候人ニ安堵致し候然共時ニ少し鳴く  
様子夜ニ入候而も少しハ鳴候へ共永くハ鳴不申さしたる事  
も無之候一昨夜より今昼前迄絶間なく鳴つゞき次第ニ強く  
鳴動九ツ前より静ニ相成今日風聞に信州浅間山北辺り焼候  
も山村高原より往還千賀迄八郡へ委しく申相候由(八八才)

【校異】蓬左文庫本―国立国会図書館本の順に掲げる。

七三才 御小納戸三番丁住居之人―御本丸御小納戸

一面にゞ是も一ナシ

七四ウ 白重箱―白杵重箱 家具類ゝ生木一ナシ

七五才 出家―出水 鱸―うなぎ

七八ウ 家鳴続―家居鳴り渡り

八〇ウ 行燈挑灯ニ而―挑灯ともしける 二軒―二万 被

押潰田畑作毛ハ―被押しと訴出候し畑作等は

【参考文献】

森嘉兵衛・谷川健一編『日本庶民生活資料集成』第七卷(一九七〇  
年三月 三一書房)

浅間山麓埋没村落総合調査会・東京新聞編集部特別報道部共編『孀恋・  
日本のボンベイ(最新増補版)』(一九八三年三月 東京新聞出版局)

浅間山麓埋没村落総合調査会 児玉幸多・大石慎三郎・斎藤洋一編『天

明三年浅間山噴火史料集 上』(一九八九年四月 東京大学出版会)

石川了著『江戸狂歌壇史の研究』(平成二十三年三月 汲古書院)

(あざい けいこ)